

「徒然道草」 雑感

三馬市 杉臣 武（幸町出身）

早いもので「お元氣ですか」に駄文を書かせていただいて三年過ぎました。はじめは半年で次々にリレーというところでしたが、なぜか延び延びにトラックを三周してここまで来ました。「もういいよ」とも言わず（咳いている人がいるかも知れないが聞こえない）、毎号書かせてくださる編集者と読んでくださった読者の方々、まことにもって有り難いことであります。そこに今度は「道草」執筆の苦労話を、という（依頼）であります。

正直言つて苦労話というようなことは無いのであります。兼好法師は「つれづれなるままに・心に移りゆくよしなし事を、そこはかとなく書きつくれば」と仰有つて、あの名作を残されました。私も身辺雑事を「そこはかとなく、書きつづつて楽しんでいきます。しいて苦労と言

えば「お元氣ですか」の性格上、筆先があまり議論めいた方向に行かないようにブレーキを意識するくらいでしょう。取り上げたテーマは沢山ありますが、読んだ人が和やかな気分になつてくださらないといけませんね。それと私は同じ物を自分のホームページに載せています。こちらは人目を惹くため自分で撮つた写真を入れられるようなテーマを選ぶ必要

があります。第二の制約です。この二つの制約を自分に課して「道草」を食う、いや書いている訳です。

「徒然草」を初めて知つたのは中学生の頃だつたと思います。文学同様植物にも無知だつた私はそういう名前草が実際にあるのかと思つたものです。高校に行つたら、某先生が「徒然草について書け」という問題に「十字科植物の一種で

ある」と答えた生徒がいたと笑われた話を聞いて、似たような者がいるなと思ひました。

高校生の頃は通世を礼賛する兼好に反抗する気分がありました。当然でしょう。高校生が通世趣味に共鳴していたのでは日本の将来はどうなる？ しかし十年以上も前に高校生の意識調査をしたら、その日その日を呑気に暮らす」という意見が大勢を占めたのだそう、彼らは若くして通世願望の境地に達していたのだろうか。今の高校生がこの意見を継承しているかどうか知りませんが、政府や世の識者が慌てる二ト、フリーターの「淵源又実に此に存す」であります。

高校生時代の皮相な兼好嫌いから抜け出して、「徒然草」が含蓄する人間観・人生観の妙味を理解するには私自身それなりの人生経験を積む必要がありました。彼の生没年はよく分かりませんが「徒然草」を書いたのは四十代後半から五十代前半のようです。私もそのくらいの年齢でやっと作品の面白さが分かるようになりました。「道草」の冠に借用した次第です。

（杉臣さんのホームページをご覧ください。たくさんの旅が載っております。

<http://www2.ocn.ne.jp/~sugitomi>



旅姿・白河城にて



ハンブルグ港にて 博物館となっている旧ソ連の潜水艦前で